



ガチャ から始まる
錬金コイコ

GACHA KARA
HAJIMARU
RENKIN LIFE

著 盾乃あに ill. aoki

● 主な登場人物 ●



きむら かえて
木村楓
一人称が「オレ」の女剣士。
パーティーにおける
物理アタッカー。

たちばな かれん
立花可憐
ヤトを慕う十代の女の子。
火魔法が得意。
言いたいことははっきり
言うタイプ。

うどう もく れん
有働木蓮
有働姉弟の弟。
パーティーにおけるヒーラー兼
魔法アタッカー。
姉が苦手。

うどう し おん
有働紫音
有働姉弟の姉。
パーティーにおけるタンク。
弟には厳しい。



謎の猫？
ヤトにとって
重要な存在らしい。
猫ではない？

かわち やと
河地夜人
本作の主人公。底辺日雇い
冒険者をしていたが、
『ガチャ』スキルを得たことで
人生が激変する。
ビール好き。

1 ガチャと錬金術

俺の名前は河地^{かわち}夜人^{やと}。スキルに目覚めたのはつい最近で、『ガチャ』のスキル持ちになった。年齢は三十一歳で、遅咲きの冒険者だ。



「河地！ 遅いぞ！」

「はい！ すいません！」

ジメツとした洞窟の中、剣と防具を装備して周りを警戒していると、「遅い」と怒鳴られる。

俺は日雇いで、ダンジョンに潜ってコツコツとスライムなんかを倒して魔石を得る仕事をしている。

「なにゴブリンにビビってんだ！ それくらい今の若い奴らは簡単に倒してるぞ！」

グループリーダーのデブ、猿渡^{さわた}に言われるが、なんのスキルも持たない俺は、ゴブリンでさえ倒すのがやっとだ。

「ほら来たぞ！ 行け！」

「は、はい！」

猿渡に言われるがままに突進していき、剣で突き刺そうとする。

だが、ゴブリンは俺の攻撃を避け、棍棒^{こんぼう}で俺の脇腹を叩いてきた。

「ゴフツ」

続けて、背中をメチャクチャ叩かれる。痛みを耐えつつなんとか剣を横に薙ぐと、当たりどころがよかったのか、ゴブリンは光になって消えた。

残ったのは魔石だ。

「つたく！ ゴブリンくらいで情けない！ さっさと拾って次に行け！」

「はい！」

痛む体を我慢しながら次の……できれば弱いスライムを探す。

ダンジョンができたのは百年以上前。今や魔石は、電気に代わるエネルギー源として現代社会で欠かせない存在だ。ダンジョンはそんな魔石が採れる資源の宝庫になっている。

だが、ダンジョンでの死亡率は高い。冒険者の資格は簡単に取れるが、スキルやジョブが発現しないと、ダンジョンでの活動は制限される。

魔石以外に、需要の高いポーションなどもダンジョンから出る。だが浅い階層では出ないし、鑑定が必要なので俺には無関係だ。

ちなみにうちの会社は、普通の冒険者が見向きもしないようなSランク冒険者になりたい。ズ魔石を集め、小さな工場で加工している。そんなわけで、俺みたいな底辺冒険者が、この会社では必要とされているのだ。

俺だってジョブやスキルがあれば、ダンジョンの最奥まで行くようなSランク冒険者になりたい。だが、どうやら俺は『無能』のようで、レベルが上がっても、未だにジョブもスキルも獲得できないでいる。

ノルマのクズ魔石を集めていると、スライムが出てきた。

「やった、これで今日のノルマ達成だ！」

スライムの色が少し違う気がするが、気にせず剣を刺して核を潰す。

「えっ！」

クズ魔石の代わりに、なんと宝箱が出てきた。

開けてみると、スキルを手に入れることができるアイテム『スキルボール』が入っていた。スキルボールを手にとると、宝箱は消えた。

「おい、まだか！」

猿渡の声にビクツとした俺は、そのまま胸にスキルボールを抱える。すると、胸の中へとスキルボールが入っていつてしまった。

スキルを獲得したらしい？

「お、おお！ ……あ、はい！ すぐに行きます！」

ちょうどよくスライムが出てきたので、それを倒して魔石を袋に入れる。これでノルマの百個の魔石を採れた。

「あとお前だけなんだぞ。待ってるこっちの身にもなれ！」

「す、すいません」

「まあ、いい！ 明日はもっと早く集めるようにな！」

「はい！」

ダンジョンから出てバスで会社に向かい、魔石を確認してもらい今日の給料をもらう。日給7000円だ。

ちなみに、クス魔石は一個100円だから普通に売れば1万円になるはずなんだが、個人でギルドに持っていったとしても2000円の手数料が取られる。日雇いとはいえ会社に所属していれば、剣なんかの武器防具は貸し出されるし、日給7000円は支給される。

まあ、俺にはこれが合っている。

しかし、さっき獲得したスキルはなんだったんだ？

会社から出て自転車での帰り道。スーパーに寄って弁当とビールを買い、家に急ぐ。あの場でステータスの確認はできないからな。

「ふう、まずはビールだ！ 乾杯」

家で乾杯する相手もないが、つい口にする。

そして一口飲んでから、

「それじゃあステータスオープン」

河地夜人 (31歳)

ジョブ	ガチャ師 Lv 1
レベル	6
STR	13
DEF	15
INT	13
DEX	16
AGI	18
LUK	30
スキル	ガチャ (100/100)
SP	6

これが俺のステータスだ。

これが俺のステータスだ。
STRは力、DEFは防御力、INTは知力、DEXは器用さ、AGIは素早さ、LUKは運になる。

SPはスキルポイントだが、剣術スキルでも50ポイント必要なので使えない。

なお、レベルが上がるとステータスの数値も1から3の間で上がる。これは運だ。

このレベルだと、普通の人はだいたい各ステータス20前後なのでまあ弱いほうだな。LUKだけは高いのだが、今まで運がいいことはなかった。

そして、ジョブとスキルの欄にそれぞれ、ガチャ師、ガチャ、というものが加わっている。これがスキルボールで得たスキルか？

「ガチャガチャのことかな？」

俺は弁当を開け、ビールを一口飲んで、スキル欄の『ガチャ』を押してみる。

ガチャ 魔石を使い、ガチャを回すことができる。

と説明が書いてあった。

魔石を使うのか。なら、明日頑張つて多くのクズ魔石を採れるようにしよう！

ビールをグイッと飲むと、ステータス画面を閉じる。弁当を食いながらテレビをつけ、ぼやく。

「はあ、剣術とかのほうがよかったのになあ」

次の日。

「おい！ 今日早く終わらせろよ？」

「は、はい……」

猿渡にそう言われて萎縮してしまうが、今日はクズ魔石を百個以上集めてしまわないとな！

「おりゃー！」

「グギャ」

ゴブリンだつてなんとか倒せるんだ。時間内に頑張るしかない。昼まででだいたい六十個は集まったから、このペースでいけば百は超えるだろう。

俺は食い終わった弁当箱に、ガチャで使う用にクズ魔石を十個だけ入れておく。

「おいまだか！」

「は、はい！」

くそ、読みが甘かった！ あと三個だ。

なんとか三体を倒して百個になった魔石袋を持っていく。

「す、すいません」

「お前、明日から来なくていいから！」

「え！」

「お前のために待つのは時間の無駄だ！」

「そ、そんなー！」

「そんなも何も、お前みたいな奴は他にもいるからな！」

俺は、職を失ってしまった。



スーパーに寄ってビールと弁当を買って、トボトボと自転車を押しながらアパートに帰る。

「はあ、明日から仕事探しをしないとイケないな」

一応、食い扶持を稼ぐくらの当てはある。会社所属じゃなくても、ダンジョンには潜れるかな。

「それじゃあスキルでも使ってみるか」

弁当箱からクズ魔石を取り出してから、スキルを念じる。

すると、ガチャの本体が出てきた。真っ白な筐体の中にいろんな色のカプセルが入っている。

とりあえずクズ魔石を横の投入口に入れてみると、『1/10』と出た。クズ魔石十個で、ガチャ一回できるらしい。

しようがないからクズ魔石を全部入ると、ガチャが回せるようになった。

ガチャガチャ。

出てきたのは、金色のカプセルだった。

「おお！ いいのが出たんじゃないか？」

カプセルを開けると、鞆に入った剣が目の前に出てきた。カプセルは消えた。

「は!？」

剣は……ギルドで登録しないと、銃刀法違反で捕まってしまう。

クビになった翌日から職探しつても馬鹿らしいと思ってたし、とりあえず明日はギルドに行つて剣の登録をしようかな。

次の日。

服装は普段着で、ジャケットにジーンズとブーツ。剣はシャツに包んで、自転車でギルドに向かう。

ギルドの中に入ると、役所のような雰囲気だった。『登録受付』と書いてある場所に向かう。

「す、すいません。剣の登録をしたいんですが？」

「はい。では、冒険者証と登録したい剣をここに置いてください」

「はいー」

俺は冒険者証と、シャツから出した剣をカウンターに置く。

「保護バッグはないんですか？」

「保護バッグ？ そんなの持ってないよ！」

「すいません、この剣、もらい物なので、すぐに持ってきたほうがいいと思ひまして……」

「では、あちらの売店で保護バッグを買ってきてください」

「あ、はい」

売店に行き、剣のサイズに合った保護バッグをお願ひすると、なんと9000円もした。

はあ、しようがないから買うけどさ……稼がないとな。

また受付に行き、登録してもらおう。

「では、今から使いますか？」

「はい！」

「バッグが邪魔なときはあちらのロッカーをお使いください」

「わかりました」

ふう、お金がなくなってしまった。今日は働かないつもりだったけど、頑張つて魔石を採るか！
ロッカーにバッグを入れて鍵を閉める。一応リュックは持ってきているので魔石を入れるのは問題ないな！



ダンジョンにやってきた。

駅の改札のような機械に冒険者証を読み込ませて入ると、いきなり扉がある。扉から中に入る。洞窟だ。いつも見ている風景なので代わり映えしないが、会社から支給されていた防具がないのでちょっと怖いな。

「グギャ」

「おわ！ よ、よし！」

さっそくゴ布林とエンカウトしてしまった。

だが、こっちは剣を持つてゐるからな！ 剣を出すのに手間取ったがなんとか鞘から抜けて、ゴ布林に斬りかかる。

ズバン。

「おわっ！ き、切れ味がいいな！」

一撃でゴ布林は魔石に変わった。

「よ、よし、この調子で行こう！」

それから一階層を歩いて、ゴ布林やスライムを倒してクズ魔石を集める。やはり剣の切れ味がいいので防具なしでもなんとかなつてゐるな！

少し強くなった気がした俺は、いつもより少し奥に進んでしまったようだ。

「結構深く来たな？ ……っ!？」

ゴ布林ソードマン（剣を持ったゴ布林）がいた。すぐに岩陰に隠れ、そーつと後退りするが、気づかれたようで追いかけてくる。

「うおおお!!」

「グギャアアアア」

逃げたが袋小路に入ってしまった、あとがなくなった。

「く、くそ！ や、やるなら来い！」

「グギャー！ グギャアア!!」

ゴ布林の上段からの振り下ろしを、俺は剣で受ける。
ガキンッ。

「へ？」

「グギャ？」

ゴブリンソードマンの剣は折れてしまった。

「へ、へへ」

「グギャ……」

「オラア！」

剣を上段から振り下ろし、ゴブリンソードマンを倒す。

なんとかなったので気が抜けて腰を下ろす。

「ハアアア……こ、怖かった」

とりあえず今ので百個だから、そろそろ帰るか。

なんとかダンジョンを出て、改札を抜けた。

ロッカーからバッグを取って剣を入れる。自転車に跨またって、スーパーに寄ってから家に帰る。

「はあ、今日はなんか疲れたな」

リュックを下ろして、冷蔵庫からビールを出す。

「クハッ！ この一杯がたまらん！」

今日も食事をとりながら、テレビを見る。別に見たい番組はないが、テレビがついてると落ち着くのでつけている。

「はあ、よし！ ガチャやろう！」

ガチャ、と念じるとガチャの筐体が出てきた。とりあえず一個ずつ入れていく。

十個入れてから「もう一個入るかな？」と入れてみると入った。リュックの中のクス魔石百個全部入った。ガチャの筐体に『11連ガチャ』と表示される。一度に十回分入ると、一回分サーピスが付くらしい。

「へえ。ソシヤゲみたいだな」

ガチャガチャと回すと、ポンポンと出てくるカプセル。

白が三個、赤が二個、青が二個、紫が一個に銀が一個、金が二個だった。へえ、いろんな色があるんだなあ。

「金が一番いいやつかな？」

とりあえず白から開けてみる。

ナイフ、フライパン、バット

「お、おおう、武器になるのか？」

とりあえず横に避けとく。赤のカプセルを開ける。

弓、盾

「おおう、さつきよりはよくなったな」



青のカプセルは、

胸当て、肩当て

「やった！ 防具だね」

これは当たりだろ！ 続けて紫のカプセルを開ける。

銀のバンダ

なんの腕輪だ？ でもカッコいいな。次、銀のカプセルは、

錠剤

「やばい薬じゃないだろうな？」
ラスト金のカプセルを開ける。

スキルボール、肩掛けバッグ

「うおっ！ スキルボールだ！」

俺はスキルボールを手にとると、そのまま確かめせず胸に当てる。スキルボールは胸に吸い込まれ、どうやらスキルを獲得できたらしい。

ステータスを見てみると、

「鑑定!？」

どこの会社も欲しがるとはスキル、鑑定じゃないか！ さっそく今まで出たアイテムを鑑定する。

ナイフ ↓ 錆びたナイフ
フライパン ↓ テフロン加工のフライパン
バット ↓ 木のバット
弓 ↓ 木の短弓
盾 ↓ 木の盾
胸当て ↓ 鋼鉄の胸当て
肩当て ↓ 鋼鉄の肩当て
銀のバンダ ↓ 力の腕輪
錠剤 ↓ 素早さの錠剤
肩掛けバッグ ↓ マジックバッグ(大)

「す、すげえ！ 紫のカプセルから上は当たりだな！ いや、鋼鉄の装備も当たりだけど！ マジックバッグ!？」

マジックバッグなんて当たりも当たり、大当たりじゃないか！

昨日ガチャで手に入れた剣も鑑定してみると、

剣 ↓ ミスリルソード

これも売れば高いやつやん!!

とりあえず、さつき鑑定した錠剤を飲んでみる。怖いけど、水で流し込む。

「プハッ！ あとは力の腕輪だな！」

シンプルなバンダを左腕につける。

「ステータスオープン」

河地夜人 (31歳)

ジョブ ガチャ師Lv1、鑑定士Lv1

レベル 9

STR 18 (+10)

DEF 19

	INT	19
	DEX	18
	AGI	29
	LUK	33
スキル	ガチャ (88 / 100)、鑑定	
SP	9	

「レベルが上がってるし。AGIが29！錠剤で10も上がったのか！」
力の腕輪も『STR+10』だし、これはいいぞ！
レベルも上がって少しステータスも上がったな！今日の分は余裕で回収できたな！



ということまで次の日になった。俺はマジックバッグにミスリルソードと防具、お茶なんかを入れてギルドに出かける。
売店で、ミスリルソードを体に固定する剣帯を買う。1万円だが、そのうち元は取れるだろう。
剣帯にミスリルソードを通して固定する。防具も調整してもらい、ここでも調整料で2000円取られた。

「クソツッ！ 足元見やがって！」

その後、改札を抜けて、ダンジョンの一階層に入る。マジックバッグも肩にかけてあるので邪魔にならない。

「ハッ！」

やはりAGIが10違うと、かなり体が軽い！走ってみるとやっぱり動きも違うみたいだ。速く
なってる気がする。

「今日は防具もあるし、前回の俺と違うぞ！」

と言っても、今日もダンジョンの一階層を回るだけ。それでも、ゴ布林ソードマンなんかにも
楽勝！

二階層への階段を見つけたが、そこに入るのはまだ俺には無理だ。

ガチャが引けるし、クズ魔石を集めるとしますか！

「おりゃ！」

よし、これで二百個目！十一連が二回引ける！

自転車を漕いでアパートに帰ってくる。さっそくビールを開けてガチャを回す。
ガチャガチャ。

白四、赤二、青一、紫二、銀二。

「かあ、金が出なかったか！ よしもう一度」

白五、赤一、青三、紫一、銀一。

「クソッ！ 金が出ねえ！」

合計白が九個。開封と鑑定を同時にやると、

木のバット、中華鍋、チェーン、金属バット、ボール、土鍋、ゴルフクラブ（アイアン）、
草刈り鎌、鉈なた

「……武器になるやつも、あることにはあるな」

次は赤のカプセルだ！

矢のセット、木剣、木槍

木製の武器は練習にはうってつけたが、今はいらぬ！

青のカプセルが四つ。

鋼鉄の盾、レザーアーマー、ガントレット、レッグアーマー

うん、レザーアーマーが一番動きやすそうだな。鋼鉄の胸当ても調整してもらったから胸当てで

いいけどね。

紫はアクセサリー。ステータスの上昇値は鑑定で表示させることもできるようだ。

スピードピアス（AGI+10）、アメシストリング（DEX+10）、魔石のネックレス（
NT+10）

銀のカプセルは錠剤。

知力の錠剤、力の錠剤、器用さの錠剤

「ハムッ！ ゴクゴク」

さっそく吞んで、よし、これでまた強くなったかな！

それよりピアスカ……昔開けたところが開いてればいいけど。ひさびさにつけるピアスに四苦八
苦して、ようやくくつつけた。

よし、これで、

「ステータスオープン！」

河地夜人（31歳）

ジョブ ガチャ師Lv1、鑑定士Lv1

レベル 12

STR 34 (+10)

DEF 23

INT 32 (+10)

DEX 36 (+10)

AGI 29 (+10)

LUK 36

スキル ガチャ (66 / 100)、鑑定

SP 12

スキルのガチャの下にある数字は、カプセルの中身の数か？ なら、元々百個カプセルが入ってたわけだ。金三つ出て、銀が四、紫が四、青が六、赤が五、白が十二で、合計三十四か。

金はもう出ないだろうな。

残り六十六個。とりあえずこれを引き終わるまではやめないでおこう。



次の日もダンジョンに向かう。

一階層で回収できるクズ魔石に満足できず、ついに二階層に下りることにした。

「ふっ、俺もついに二階層に進出か！」

と言っても、敵はそこまで強くなるわけではない。二人、三人組の敵が増えるだけだ。

「おらああ!!」

まずは剣を持つてるゴブリンを倒して、そのまま横にいるゴブリンを倒す。あとはいつもと変わらないので三匹でも楽勝だ！

「ハハ！ なんだ、怖がって損した」

この日は三百五十個のクズ魔石を手にして家に帰った。

あまり期待はせずにガチャを回す。三十三連引いて半分は白いカプセルだった。

鈍がもう一本出てきたのはよかったかな。あとは赤いカプセルと青いカプセルが残り大半を占めていて、紫と銀のカプセルが一つずつ出てきた。それぞれ、

防衛リング (DEF +10)、防御力の錠剤

だった。

ここまで来たら、ガチャをやりきったらどうなるのか気になるので、やるしかないな。

次の日も二階層でクズ魔石を集め、三百個になったので帰る。

これで、ガチャは全部引いてしまうことになる。もしこれでガチャスキルがなくなっても、俺には鑑定スキルがあるから仕事はなんとかなる！ そう思って、残り三十三連を引く。
白いカプセルばかりで、青と赤が少し。最後のカプセルは虹色にじだった。
開けてみるとスキルボールで、そのスキルは『錬金術』だった。胸に押しつけ、ステータスを見ると、錬金術がスキル欄に載っていた！

河地夜人 (31歳)

ジョブ ガチャ師 Lv 2、鑑定士 Lv 1、錬金術師 Lv 1

レベル

14

STR

38 (+10)

DEF

41 (+10)

INT

36 (+10)

DEX

38 (+10)

AGI

36 (+10)

LUK

35

スキル

ガチャ (300 / 300)、鑑定、錬金術

SP

14

しかも、ガチャ師のレベルが2になっている。
念じて出してみると、ガチャの筐体が銀色に変わっていた。
しかしクズ魔石を入れても戻ってくるので、もしかしたら普通の魔石じゃないといけないのかも
しれない。

「……俺じゃ無理だよ」

2 パーティー

俺に、クズ魔石ではなく、普通の魔石を採ることができるのか……

次の日、とりあえずギルドに来た。

一応錬金術のスキルを確認したら、

錬金術

鉄や鉛なまり、銅などの卑金属ひきんぞくから金や銀などの貴金属を製造する秘術。

不老長寿の薬や万能薬も作れる。

と載っていた。

ウィンドウに『↓』があったので見てみると、

低級ポーション 薬草 + 聖水
中級ポーション 上薬草 + 聖水
解毒薬 毒草 + 聖水
石化解除薬 岩きのこ + 聖水
インゴット 金属

と五種類のレシピが載っていた。

さっそくレシピにあったアイテムを作ってみようと、素材調達のため、ダンジョンに行く。素材を探して鑑定していく。

薬草はそこら辺にあるので探さなくても採れた。上薬草は見つからなかった。途中で出てくるゴブリンどもから得たクズ魔石もマジックバッグに入れる。

ある程度採ったので家に帰ることにする。

途中で、ミネラルウォーターも一応買っておいだ。

アパートの一室でミネラルウォーターに手をかざして念じると、少し光った？ 鑑定すると聖水になっていた。これで素材が揃ったので、ポーションが作れるな!!

白カプセルから手に入れていた土鍋に、聖水と薬草を入れて蓋を閉じて念じる。

「ポーションになれえー！ ポーションになれえー！」

光ったので開けてみると、なんと三本の低級ポーションになっていた。

「えっ、瓶はどこから出たんだ？」

まあいいか、とすぐに切り替え、引き続き低級ポーション作りをしていく。

全部で二十本のポーションになった。

「よし！ これを売って魔石を買おう！」

魔石は一個1万円で取り引きされているので、買うこともできるのだ。

あとはインゴットも作ってみよう。白カプセルから出てきた、いらぬ金属バットやフライパンなどが素材になるらしい。

さっそくインゴットにしてみた。どうせなら金のインゴットにならないかなと思っていたら……なかった？

「お、おい、これどうすんだよ！ こんなんじゃ逆に売れないだろ！」

……とりあえず目の前の土鍋、ポーション、インゴットを放置したまま、缶ビールを開ける。

改めて現実と向き合う。

「で、どーすんだよ。こんな金のインゴット……いくらで売れるんだ？」

スマホで検索すると1グラムで1万4159円。このインゴットは、10キログラムある。つまり、1億円を超える取り引き……

できるわけないよな。はあ、まあ、仕方ないからマジックバッグの中に入れておくか。

低級ポーションは売れるよな！ これもネットで調べると、ポーションの価格は一本10万円！
こっちもすごいが、少しずつ売ればバレないだろ！



次の日、ギルドに行き「昨日見つけた」と言つて、五本のポーションを売りに出す。

「は、はい！ それでは鑑定士を呼びますので、ちよつと待つててください！」
受付してる子もビックリだったようだな。

「失礼します。鑑定士の佐々木です」

「ども」

「見事なポーションですね！ 本当に売りに？」

「はい！」

「ありがとうございます！」

「では、鑑定書代を引いて、47万5000円になりますね」

「え、高っ！ 鑑定しただけで2万5000円？」

「……はい、でも鑑定書がないと売れないんですよ？」

不満タラタラだが、売るのを了承した。

そして俺はまたダンジョンに潜っている。

「クソ！ なんで鑑定だけであんなに金取るんだよ！」

俺はむしゃくしゃして……三階層に下りてきてしまった。

とはいえ、まあ、三階層くらいなら問題ないだろ。ゴブリンを倒してクズ魔石を拾う。

「だあー！ 腹立つなあ！」

「グギャ!？」

「おらああ！」

いつにも増してミスリルソードの切れ味は抜群だ。

「キヤアアアア」

「な、な？ なんだ？」

「お、お兄さん、逃げてえええええ！」

「え？ あ、お、おわああああ!!」

ゴブリンをはじめとした魔物の群れが女の子を追いかけ、その子が俺を追いかけてくることでの列になる。俗に言う『トレイン』というやつだ!!

俺たちは洞窟の中を駆けていく。

「ふ、ふざけるな！ 俺まで巻き込むなよ！」

「ご、ごめんなさい！ でも、私もう無理かも」

「だあ！ も、もうちよい頑張れ！ 階段はすぐ……」

「もう無理……」

「ザァァと、女の子は倒れてしまった。俺は止まって通路を見る。そこまでのトレインじゃないな！」

「く！ こなくそ！」

「ゴブリンのトレインごとき、俺のミスリルソードでなんとかしてやる！ ダンジョンの通路も狭いし、スピードを活かしてこちらから倒しに行けば、ゴ布林たちも怯むはず。なんとかなりそうだな。」

斬りかかるゴブリンの剣をジャンプで躱して、ミスリルソードを振る。

五体まとめて斬り伏せた。そのまま突っ込んでいき、流れるようにミスリルソードを振るっていく。

「おらああ!!」

最後尾にいたのは、ブラックバッファロー。初めてだがもう止まらない。

「最後だ、このやろう!!」

ブラックバッファローの脳天にミスリルソードを突き刺して、倒れて消えていくのを見る。

「つしゃー！ こんにやるー！」

ドロップを拾ってバッグに詰めていく。一息ついて女の子に声をかける。

「おい、おい！ 起きれるか？」

「も、もう走れません」

抱き起こして、女の子の口元にポーションを近づける。

「いいからこれ飲め」

「み、水！ ゴクゴク！ た、足りない！」

「そりゃ足りないだろうな。ポーション一瓶空にしたので、ペットボトルの水を渡す。」

「ほら、こつちも飲め」

「ん？ え？ んえ、ええ！ さっきのポーション？」

「空の瓶を見てから、自分がポーションを飲んだと気づく女の子。」

「仕方ないだろ？ あんだけ体力なくなってたんだから」

「べ、弁償します！ すいません！」

「いやいいぞ。それよりもう大丈夫か？」

「はい！ 魔物たちは？」

「俺が片付けた！ もう大丈夫」

「女の子はきよんとしている。」

「すご！ 有名な冒険者さんですか？」

「急に元気になったな。」

「いや、二階層でちまちまやってる。俺は基本弱いからな」

「そ、そうなんですか？ ならなんで？」

「そりゃ、火事場のなんたらで、まあ、なんとかやってよかったよ」

「女の子は立ち上がると、頭を下げて、」

「私、立花可憐たちばなかれんって言います。今回はすみませんでした！ ポーション代もきちんと払います！」

「いや、ポーション代はいいよ。カレンさんはいくつなんだ？」

頭を上げたカレンは、ショートカットの可愛らしい子だ。

「今年で十八になります」

「そうか、で？　なんで一人なの？」

「それが……」

元々仲間たちとダンジョンに潜っていたらしい。だが、みんな進学のためにダンジョンから足を洗ってしまい、進学しないカレンは一人で潜るしかなかったようだ。

それにしても一人でダンジョンは危ないだろ。一人で潜っている俺が言えたことじゃないが。

「カレンさん、スキルは？」

「あります！　火魔法です」

「思いつき後衛じゃないか！」

「そうなんですよ」

武器は杖のようなものだな。

ここでカレンさんが提案してくる。

「そうだ、お兄さん！　私と組まないですか？」

「少し迷うな。んー、まあいいけど、危ないことはしないよ？」

「はい！　私も行っても五階層だったんで！」

俺としても仲間が欲しかったところだ。

「ならよろしくな！　俺の名前は河地夜人だから、ヤトでいいよ」

「じゃあ私も、カレンでお願いします」



とりあえず三階層から出て、二階層に戻ってゴブリンと戦う。やはりレベルが上がったのか、体が軽く動けるようになってる。

「ふう。二階層は楽勝だな」

「はい！　やつぱり前衛がいると違いますね！」

「俺は前衛職ではないけど、まあ、レベルでなんとかなるもんだな」

「そうなんですか？　剣でバッサバッサと斬ってるから、剣術持ちか何かだと思ってましたよ」
「だつたらよかつたんだけど、鑑定とか錬金術とかだからな。」

「まあ、ゴブリンくらいならなんとかなるから」

「はい！　私もレベル上げないといけませんね！」

さらに階層を戻り、改札を抜ける。

カレンと電話番号を交換し、明日もダンジョンに潜る約束をして別れた。

今日は、儲かったから焼肉でも食べに行くか！

「うめえ……」

一人焼肉だ。ビールを飲みながらハラミを食う。

やはり動いたあとのビールに肉は最強だな！ それにしてもあのトレインはなんとかなってよかった。火事場の馬鹿力が出たのか、アドレナリン全開だったからな。今後はさすがにもうあんな無茶はしないがな。

それはさておき、ポーシオンを売ってお金を作って、魔石を買ってガチャを回さないと。

焼肉屋をあとにして、冒険者専用の店『プライド』に行く。ここはブランド物も扱っている。入ったことなかったからドキドキだな。

「いらつしやいませ。どのようなご用件でしょうか？」

スーツを着た男がやってくる。

「あ、ポーシオンを売りたいんですけど」

「ほ、本当ですか！ ではこちらに」

案内されたのはカウンターで、低級ポーシオンを十本置く。

「す、すごいですね！ ポーシオンを十本も！ ありがとうございます！」

「いえ。で？ 売れますか？」

「はい！ 一本10万円で100万になりますが」

「そ、それでお願います！」

よし！ これで軍資金はゲットだな！

「それでは100万円になります」

「あれ？ 鑑定は？」

「私が鑑定を持てますので」

100万円を受け取った俺は尋ねる。

「それと……五階層以降の魔石はありますか？」

「はい！ ございます」

男が奥に入っていくと、持ってきたのは段ボールに入った魔石だった。

「こちらはホブゴブリンの魔石になりますが、いくつ必要ですか？」

「では五十個ほど」

「……わかりました！ では一個8000円ですので、五十個で40万円になります」

金を払い、マジックバッグに入れて帰ろうとすると、

「私は支配人の如月と申します！ またポーシオンなど買い取りがあれば、こちらに持ってきてもらえますか？」

「はい、お願いします」

名刺をもらって自転車を押しながら帰る。

「いやあ、ギルドで売るよりも儲けたな！」

どっちにしても、ほとんど原価ゼロ、元はただの薬草とミネラルウォーターだから大儲けだな！

家に着くと、冷蔵庫からビールを出して、飲みながらガチャと念じる。
銀色の筐体に魔石を一つ入れると、『1/1』になった。十個入れてみると『11連』と表示される。思い切って回すことにする。

ガチャガチャ。赤が二個、青が三個、紫が二個、銀が二個で、なんと金が二個！
「大当たりだ！ しかも白カプセルがない！」
まずは赤から。

低級ポーション×2

え、中身が変わってる？ 赤は木剣だったりしたのに？ だとしても内容がよくなってるので、これは期待ができるな！
続いて青のカプセルは、

ミノタウルス革のフード付きコート、鋼鉄の手甲、鋼鉄の剣

おおっ、パワーアップしてる！ なんだよ、ダンジョン産の宝箱みたいだな！
紫はなんだろう？

パワードブレスレット（STR+20）、魔宝石のネックレス（INT+20）

ほお、なかなかよさげだな！
次は銀だ！

力の錠剤、素早さの錠剤

ラストは金だな！

世界樹の葉、マジックテント

「ク、クソッ！ スキルボールじゃなかったか。もう一度だ！」
四十四連一気にいくぜ！ 赤が二十二個、青が十八個、紫が二個、銀が一個、金が一個だった。赤が、

低級ポーション×7、TSポーション×2、魔力ポーション×6、上級ポーション×4、 境界石×四個セット×3

青が、

黒鬼牛のブーツ×3、鋼鉄の胸当て、鋼鉄の手甲、鋼鉄のガントレット、黒鬼牛のレザー
アーマー、疾風の短剣、魔宝石の杖、魔鉄のシャベル×2、ディフェンダーアーマー、
魔鉄の盾、魔弓、ハンドアックス、魔鉄の大槌、炎の剣、氷の剣

「ふう、結構いろいろあったな」

次は紫か、

疾風のアンクレット（AGI+20）、身代わりのミサンガ

身代わりのミサンガはいいな！ つけとこう！

次は銀、

全耐性の錠剤

これは金でもよくないか？ 次は金！

スキルボール（シーフ）

よっしゃ、スキルボールだ！ しかもジョブ『シーフ』のスキルセットか！ もっと前衛らしい
のがよかったけど、これはこれでよし！

スキルボールを胸に当てると、吸い込まれていく。

続けて錠剤を呑み込み、パワードブレス、魔宝石のネックレス、疾風のアンクレットを装備して
いく。

河地夜人（31歳）

ジョブ ガチャ師Lv2、鑑定士Lv1、錬金術師Lv1、シーフLv1

レベル

17

STR (+20)

DEF (+10)

INT (+20)

DEX (+10)

AGI (+20)

LUK 38

「おお！ これで俺も動ける冒険者になったな！」



カレンとの待ち合わせには少し早い、ギルドにやってきた。

ロッカーに着替えを入れるフリをして、黒鬼牛のブーツ、黒鬼牛のレザーアーマー、疾風の短剣を装備しておく。

レザーアーマーとブーツには魔法が付与されてるみたいで、装備した途端に体にフィットした。

ふと、独り言を呟く。

「このままガチャ屋でもやりたいが、それだと俺が弱いままだからなあ……」

昨日いろいろと考えたのだ。今後どうやって生計を立てていくのか。錬金術スキルを活かしてポーションを売って暮らすのもいい。ガチャ屋っていうのも楽しそうだ。

だが、まずは俺も冒険がしたいのだ！

そんなことを考えつつ、缶コーヒーを飲みながら椅子に座っていると、

「お、お待たせしました！」

カレンがやってきた。

「おう。疲れはないか？」

「はい！ 大丈夫です！」

「よし！ あ、これ、着るか？」

俺は、カレンにミノタウルス革のフード付きコートを手渡す。

「え！ いいんですか？」

驚いた顔をしているが、俺とレベルが変わらないくらい弱いなら、それなりに防具があるだろう。

「まあ、パーティーだからな？」

「あ、ありがとうございます！」

カレンはジャケットにパンツにブーツ姿だから、防御力がないんだよな。

「あと、これとこれも」

黒鬼牛のブーツと魔宝石の杖を渡す。

「わ、わ。どうしたんですか、これ？」

「余ってたからちょうどいいだろ。ブーツは自動調整だから、履けばピッタリになるはずだ」

「あ、ありがとうございます！ 着替えてきますね！」

カレンはそう言って更衣室に入ってしまった。

俺はその間に売店に行って、短剣用の保護バッグを買った。それから短剣を登録しに行く。

「はい、登録は終わりました」

「ありがとうございます」

すんなり登録は終わり、ちょうど出てきたカレンと合流だ。

「へえ、似合うじゃないか!」

「えへへ、そうですか! ありがとうございます」

とりあえず二人だし、いきなり三階層まで行くことにした。

「おら! よっと!」

疾風の短剣は切れ味抜群で、ゴブリンを簡単に倒していく。

「いきます! ファイアーボール!」

カレンは落ちて行動できてみたいだな!

俺は魔石を拾ってカバンに入れた。

「いいペースですね!」

「そうだな! カレンがいるから安心して後ろを任せられるよ」

「はい! 後ろは任せてください!」

三階層も慣れてきたところで、四階層の階段を見つけた。

「どうする?」

「ヤトに任せます!」

「……行ってみるか!!」

「はい!」

ちなみに階段はセーフティゾーンだ。普通に下りていくと、

「お、おい! 大丈夫か!」

女の人が怪我をして倒れていた。

「ひどい怪我!」

「あ、あ……ポーションを持ってないか?」

カレンの言葉に反応してか、女の人がそう言った。

「おう! ポーションだな!」

ポーションを飲ませる。傷がみるみる癒えていくが、まだ足りないな。もう一本出して、傷口に直接かけてやる。

「う! グウ!!」

「頑張れ! 大丈夫だからな!」

傷もなんとか癒えたので、背負って上に戻っていく。

改札に着いた。

動けない女の人の冒険者証をカレンに探してもらい、改札を抜ける。

すぐさまギルドに行き、女の人を椅子に寝かせる。

起きるまでほっとけないな。

缶コーヒーを買ってきてカレンにも渡す。

「あ、ありがとうございます」

「しかし、あんな怪我どこでしたんだろうな？」

俺とカレンは改めて女の人を見る。防具が傷だらけで、ところどころ壊れていた。

「う……うん、こ、こは？」

身じろぎした。目を覚ましたようだな。

「お、目を覚ましたか？　ここはギルドだ！」

「助かったんですよ！」

「そ、そうか……ありがとう」

「何があったんだ？」

俺が問うと、女の人が深刻そうに答える。

「私たちは、五十五階層でコカトリスと戦っていたんだ。他のメンバーは全員石にされてしまつて、それでも私一人で戦っていたのだが……命からがら撤退してきたんだ。仲間たちには、あまり時間がなにかもしれない」

石化が進めば命に関わる。石化しきる前だったら、レシピに石化解除薬が載ってたし、俺に治せるかもしれない。

確か、岩きのこと聖水だったな。

「クッ！　私に力があれば！」

悔しそうに言う女の人に、俺は尋ねる。

「なあ、岩きのこって知ってるか？」

「岩きのこ？　三十階層に生えてると聞いたことがあるが……私には判別できない」

「俺ならわかるんだ。それらしきものを採ってきてくれたら、石化解除薬を作るぞ！」

岩きのこがすんなり見つければの話だな。

「な、あんたは錬金術師か？」

「まあ、そんなとこだ」

「頼む！　一緒に行つてくれないか？　時間がないんだ」

一緒に？　俺が行つても足手まといな気がする。できれば採ってきてほしいんだが。

「俺はレベルが足りない……採ってきてほしい」

情けないがこれしか方法は……

「いや、私が守るから来てくれ！　それでも騎士だ。守りには自信があるが、火力が弱いんで君たちに負担をかけるかもしれないが」

火力を期待されても無理だ。そもそも彼女の守りで三十階層まで行けるのか？

女の人のボロボロの装備を見る。

「……とりあえず、防具をなんとかしないと」

「あ、そうだな」

「これでいいか？」

この前ガチャで出したディフェンダーアーマーを取り出す。

「い、いいのか？」

「時間がないんだろ？」

「すまない！ 着替えてくる！」

そう言って更衣室に向かう女の人。

「カレンは？」

「私も行きます！ だってパーティーですからね！」

「……そうだな」

低級ポーションの残りは十本。足りなくなったら、途中で薬草を採って作ればいいだろ。

女の人が戻ってきた。

「よし、行こうか！」

「その前に。俺は、河地夜人だ」

「すまない。私は、岸遥香だ。ハルカと呼び捨ててくれ」

「私は、立花可憐です」

「んじゃ、ハルカは防御の要だからな。俺は斥候、カレンは遠距離だ」

ハルカはキリッとした綺麗な女性で、ポニーテールを揺らしている。戦乙女と言ったところか。

「わかった！ よろしく頼む！」

改札を抜けて門を潜ると、その先はダンジョンだ。

「おらああー！」

低階層なら、俺らでどうにかなる！

「ここは俺らに任せてくれ。少しでもレベルを上げたいからな！」

「わかった！ きつかったら言ってくれ！」

とりあえず、三十階層までどこまでステータスを上げられるかだな。

3 決死のダンジョン

俺を先頭にハルカ、カレンと並んで歩く。

さすがに五階層以降は、ハルカが先頭に立つてくれた。

「ハルカはレベルいくつなんだ？」

「今は60だな」

「すごいな。俺の何倍だ？」

「でもでも。今はパーティー組んでるんで、私たちもすごい上がってますよ？」

カレンにそう言われ、ステータスを見ようとしたが、モンスターは待ってくれないのでまたあとでだな！ 俺も弱いけど、とりあえず後ろのカレンに通さないように頑張る。